

SANPO

下町通信 3号

特集 西成あたり その②



西成あたり

その②

永田 収

前回の続きのつもりでまた通天閣に登ってみる。

この前は大阪の空気も以前よりは少しましになったかなどと思ったが、よく見るとさして変わりばえはしない。やはりあれは錯覚だったのか？

ジャンジャン横丁の西側の空き地をもう一度確かめ、今度は目を北にやっただ。

下寺町から上町台地にかけて緑が案外多いのに気づく。このあたりの高低を持った地形、遙かむかしに、近くまで海が迫っていたと本で読んだことがある。聖徳太子の時代まで遡るらしいが、後に四天王寺を控え、名のごとく夕陽が丘から海に沈む夕陽を眺めたという。大陸との往来がしきりだった頃だ。

今の大阪のイメージとは程遠い、歴史の舞台で中心的存在だった大阪の話である。

今、目の前に広がる現在の下寺町あたりには、高速道路の環状線が南北に走り、その上を車がミニチュアのオモチャのように動いている。

その近くには古い鉄筋の集合住宅、市営下寺町住宅がそびえ建っている。この住宅に初めて足を踏み入れた時は、上海あたりの下町に來たかと錯覚したほどだ。これも人口密度の高い大阪の一側面だ。

今日はこの通天閣やたらと外国語が耳に入ってくる。韓国や東南アジ

アからの観光客も多いのだろう。外国からのお登りさんのように、時代遅れの通天閣からまずこの街を睥睨してみるのも大阪への正しい入門の仕方かも知れない。

展望台の一角に土産物などを売っている売店がある。ここで働く眼鏡をかけたおばちゃん、この塔が建った昭和三十一年頃からずっと働いていると聞く。なかなかの好人物で質問にもこころよく答えてくれる。三十年以上この場所ですべてな人間模様を見てきたことになる。

このおばちゃんにビリケンさんの場所を聞くと、すぐ近くにあるではないか。

ビリケンというトンガリ頭の耳のかい奇つ怪な像について、僕はつい最近まで全く知らなかった。この像はアメリカ人の女流彫刻家が夢に見た福の神ということになっている。神戸、兵庫区の松尾稲荷神社の中にも祀られているのだが、その社務所の説明書きには「……1907年頃世界的に流行し、神戸にも大正の初期に米水兵によって持ち込まれた。これを見て元町の洋食屋の主人が、客寄せのため本物を真似て、米俵の上に腰をおろし、右手に打出のコツチ、左手に瑞玉を持ち、背中に大判を背負うという和洋折衷のビリケンを作った。これを店頭で置いたところ、ビリケンは大人気を呼んだが、商売の方は悪くなる一方なので当社に相談にこられた。店主が、海に流すというのを、神様なら当社で預かる」と奉納してもらい、境内に祀ることにした。大正の中頃の話です。そして、当社に祀られている間にびん



ずる様、いわゆるなでぼとけの信仰と混ざり、病氣平癒の神としても篤い信仰をうけるようになった。……とある。

通天閣のビリケンと違いこつちは人々に撫でられて真っ黒になっている。

とにかく奇つ怪な像だがこれが後にキューピーさんの原型となったというから我々と全く無関係というわけでもなさそうだ。

さて、エレベーターを降りて今日は塔のすぐ下にある歌謡劇場に入ることにする。

入り口はコの字になって地下に吸い込まれるように曲がっている。薄暗く初めての人には入りにくい。千円の割引の時間帯に思い切つて入つてみると、階段を降りきつたところに切符売りのボックスがあり、すぐ向こうに客席が広がり、近くに小さいが派手なステージがあった。客席といつても折たたみの椅子を並べただけで、後には飲み食いができる畳の席があった。

客のほとんどは演歌好きのオッチャン達で、ちらほらと女性客の姿が見える。歌手はほとんど女性だ。

三里裕子と舞ひろこ、二人の演歌を聞いたがこの方面に不案内な僕はただ啞然としているだけ。「まぶたの母」はわかつたのだが……

客はひいきの歌手になるとテープを投げ、名を叫ぶ。地方出身の歌手との間には方言が飛び交い体温が一段と高くなる。

故郷を離れた男達は演歌の世界に涙して、酒の一杯でもひっかけ、明日への夢をつなぐのだろうか。

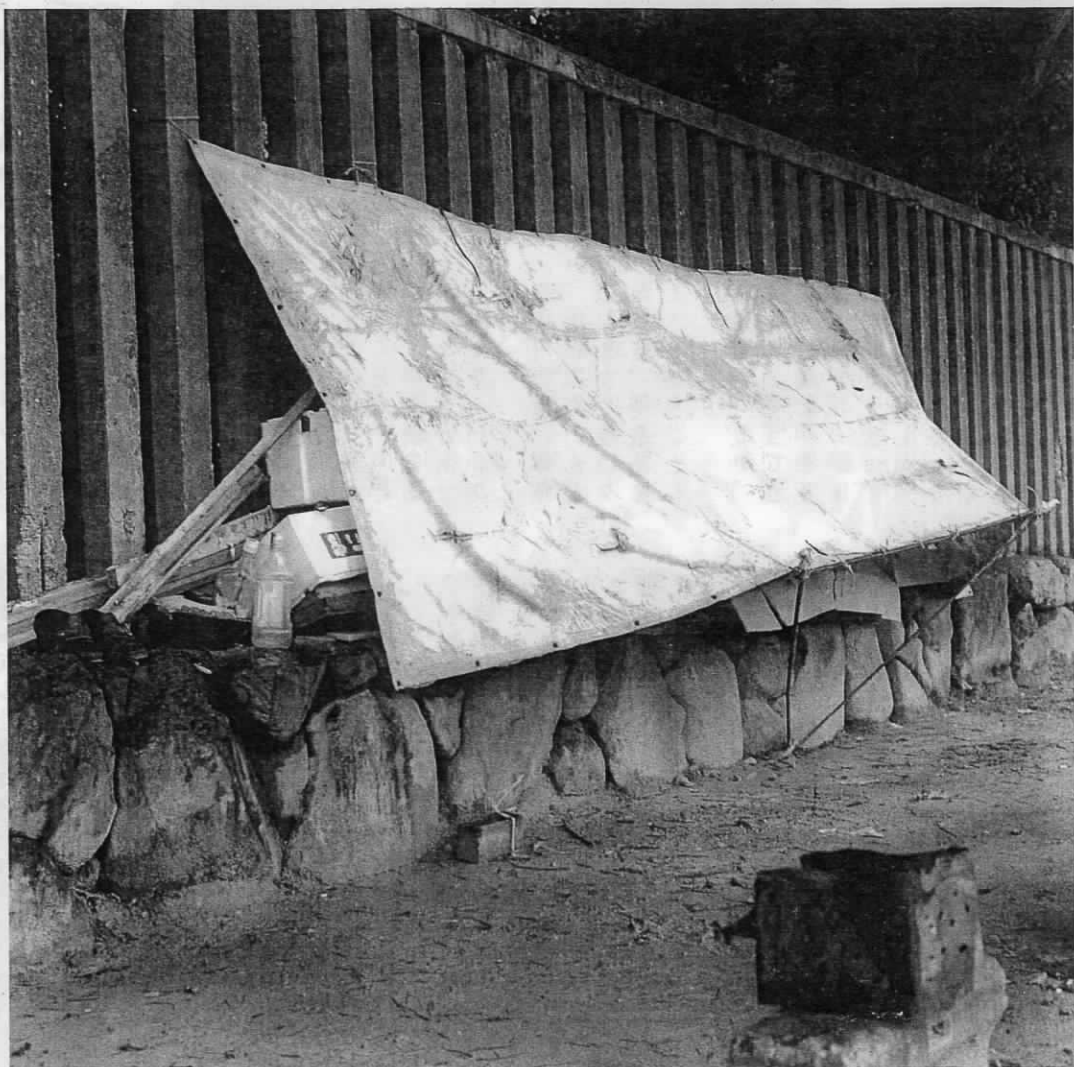
長時間居ると僕もはまってしまいそうになったので足早に劇場を後にして、動物園方向に歩いていった。

入り口あたりに数人の男達が寝ころがっている。今年の長雨は不況に加えさらなる困難を彼らに与えているのだろうか。釜ヶ崎へ今はこの名は使わない」と隣接しているこの地域は、夕方近くになるとダンボールをもつて寝ぐらを捜すオッチャン達に多く出くわすことになる。

先日は新今宮の近くの路上で、不幸にも二十歳前の女性が金品を奪うのが目的で、ある男に殺されている。少し前にはこの動物園の中で、柵を越え猿を追いかけた男が、最後には猿に攻撃され怪我をして新聞ざたになっていた。

今の社会の敏感な部分がこの釜の男達に感染し、なにも防御のない弱い彼らをそんな行動に追いやるのかも知れない。この地域も我々の社会の延長線上にあることは確かなのだ。新しくなった動物園の歩道橋を美術館のほうに歩いていくと、動物達もこの長雨で減入っているのか、ギョーという音に近い鳴声は何度も何度も聞こえていた。

美術館の横を天王寺の方に歩くと、日曜日には道端でいつもカラオケで歌っている連中がいる。今日はちよつと遅いのか数人しか残っていない。一人あつくるしい衣装で、頭をタオルで巻いたオッチャンが踊っていた。思わずカメラを向けると、後で「ええ男に撮ってもらえよ」と声がかかる。歳の頃なら五十を越えているだろうが、こつちも「かつこええで」と言つて握手をした。オッチャンの



手は何日も風呂に入っていないのか煤けて真つ黒だった。このあたり道は緩やかな坂になつて天王寺駅に登っている。何故かいつもここに來ると外国の風景を思い出す。左手に延びる美術館の柵にそつてテントが道に向けて張つてあり、ここで食事をし寝泊りしてゐる人が居る。これが時に印度か中国を思わせる光景なのだ。テントの張り方やこのだだっ広い道が妙な空間を作り異国風の雰囲氣に役かっているのも確かだ。

右手は今、オシャレな公園になつて、若いアベックがこちら側など知らぬ顔で、何組も歩いてゐる。天王寺駅前から今日は阿倍野銀座に抜けるつもりだが、この駅前あたりについて、黒岩重吾のある本の後書きでこんな描写を発見した。

「――両親を戦争や戦災で喪いどう生きて良いのかわからない子供達は地下鉄や駅の構内をねぐらし破れた布をまとい生きるために、食料を盗み、進駐してきた連合軍の兵士たちの靴を磨き、彼らが捨てた煙草を拾い、それを売って飢えをしのいだ。……私は終戦後の秋の夕、大阪の天王寺駅前の広場で見た光景が今でも忘れられない。浮浪児と呼ばれた被災孤児達は、警官や収容所の職員に捕まりドラム缶の湯に入れた。それは風呂と言へるものではない。子供達は着ていたドンゴロスを剥ぎ取られ、素裸にされると二列に並ばされ、二人ずつドラム缶に入れた。彼らはまずタワシで頭をこすられ、その後身体を洗われた。強い力でこすられ悲鳴をあげる子供

もいたが、誰も氣にとめなかった。古いモノクロの記録フィルムで見たことのあるような光景だ。このあたりに多くの浮浪児がたむろしてゐたのがよくわかる。彼らにとつて住みやすい環境があつたのだろう。

この駅前から阿倍野銀座を通り旭町商店街に抜けるつもり。阿倍野橋温泉あたりまではまだ昔の風情が残つてゐる。が、そこを曲がるともう懐かしい面影はない。

戦後すぐの旭町は、夜になると娼婦や男娼やら、それに酔客、娼婦のひも達がうろつくあやしい町だつた。ようだが、僕はつい二十年ほど前のことしか知らない。

この旭町界隈は余程興味深かつたのか、当時、僕は東灘に住んでゐたが写真を撮りに何度か通つたことを覚えてゐる。

今は再開発という名の破壊の真つ最中。現在残つてゐる店舗は、仮設のもの、がほとんど。数年後に、ここに建つビルに入り商売を続けるらしいが、立ち退き料をもらつてこの町を去つていった人も多いと聞く。

こういう再開発の話は二十数年前から進められていたらしいが、それだけの年数をかけて、通り一辺の魅力のない街づくりしか出来ないのだから行政の側の能力もたいしたことではない。

商店街を降りるとすでに開発の終わつたマンション群が目につく。さらにすすむと山王・飛田に出る。このあたり戦災から焼けのこつた所が多く、新旧のコントラストが激しい町になつてゐる。

フラフラつと飛田（旧遊廓）に入つていくと、まだ明るいというのに「おにいちゃんええ娘おるよ」「やさしい娘やで」「ちよつとほんまに何処行くの……」とやり手婆の掛け声がうるさい。

飛田は大正七年に周囲の反対を押して切つて作られた新しい遊廓、他の遊廓より値段は安く、昔は学生や近くの労働者でもじゅうぶん遊べたという。赤線廃止後も、一旦は廃業届けを出し料亭として許可を得、現在まで続いているというから何というしぶとさだろう。

三十年ほど前に遊んだことのある人に、当時のことを聞くと、やり手婆は袖をひっぱるだけ、声を掛けることはご法度だつた、というから一体今との違いはどう考えたらいいのだろう。

今の物価で三・四千円で遊べ学割りもあつたらしい。現在はほとんどなくなつてゐる周辺にあつた狭いストランドで一杯ひつかけて、待合茶屋で待つ、それから……ということになるらしい。

何故この地域に遊廓を作つたか。一つには新世界に集まる人を当て込んだのかも知れないが、僕は单身男性労働者が集まる釜ヶ崎がポイントになつてゐたのではないかと思つてゐる。また、工業社会に発展しようとしてさらなる働き手を欲してゐた大阪に集まる男どもの欲望を満たす場所が為政者には必要だつたのかも知れない。

今の飛田の存在価値がどのあたりにあるのか、僕にはよくわからない。しかし夕闇も迫る頃になると、どこ

からともなく男達が集まり何本かある通りをウロウロとします。結構若い連中もゐる。彼らはまた別の嗜好を求めてレトロな飛田にやつてくるのかもしれない。そういう時代だ。

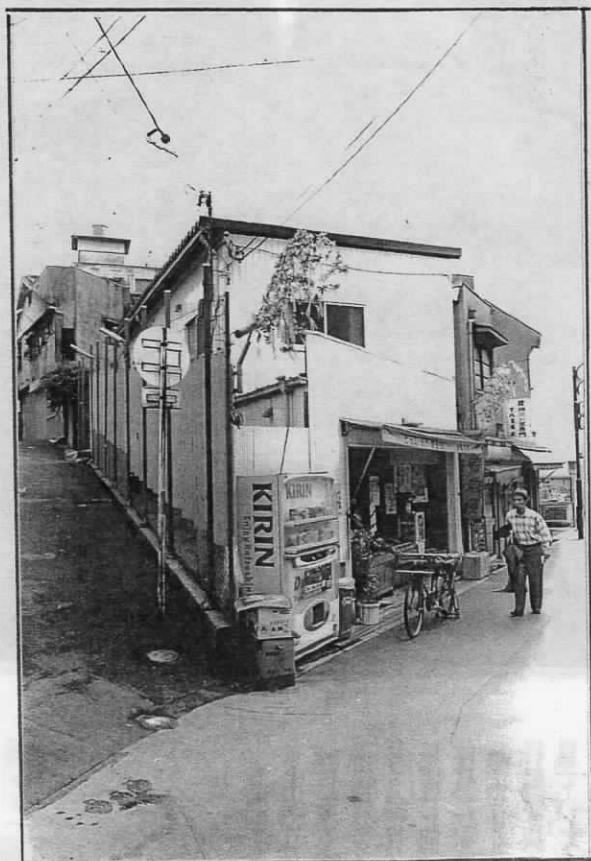
飛田を抜けて阿倍野墓地の裏に出る頃にはもう日も暮れかかつてゐた。ここは西成区と阿倍野区の境界線にあたる道で上町台地の境目でもある。眼下に広がる下町には木造モルタル作りのアパートの屋根が続いてゐる。近くの家の窓が一つ開け放つてありステテコ、ランニングシャツ姿の男が畳の上に寝ころがってしきりにうちわを扇いでゐるのがわかつた。

そろそろ天王寺駅から家路に向かう時間だ。いつか阿倍野区も歩かないとなあと考えながら、阿倍野ベルタのあたりまで戻つた。この新しいショッピングセンターを歩いてゐると「人は美しい方へ動く、いま阿倍野が新しい」というコピーが目にとまつた。陳腐で安易なコピーだ。これを考えた人は、新しいと美しいを同列にしか考えられないんだろうか。だとするとずいぶん美しいと言ひ葉をなめてかかつてゐるんじゃないだろうか。

今日も一人でずいぶん歩いた。何故かしら今日はアルコール抜きだつた。まだまだビールの季節は終わつてないのに。残念……。

天王寺駅に近づくとき段ボールを持ったオッチャン達が増えてきたのがわかつた。地下鉄の構内にも寝ぐらを作つてゐる人が多い。こんな天候といつまで続くのだろうこんな天候と……。

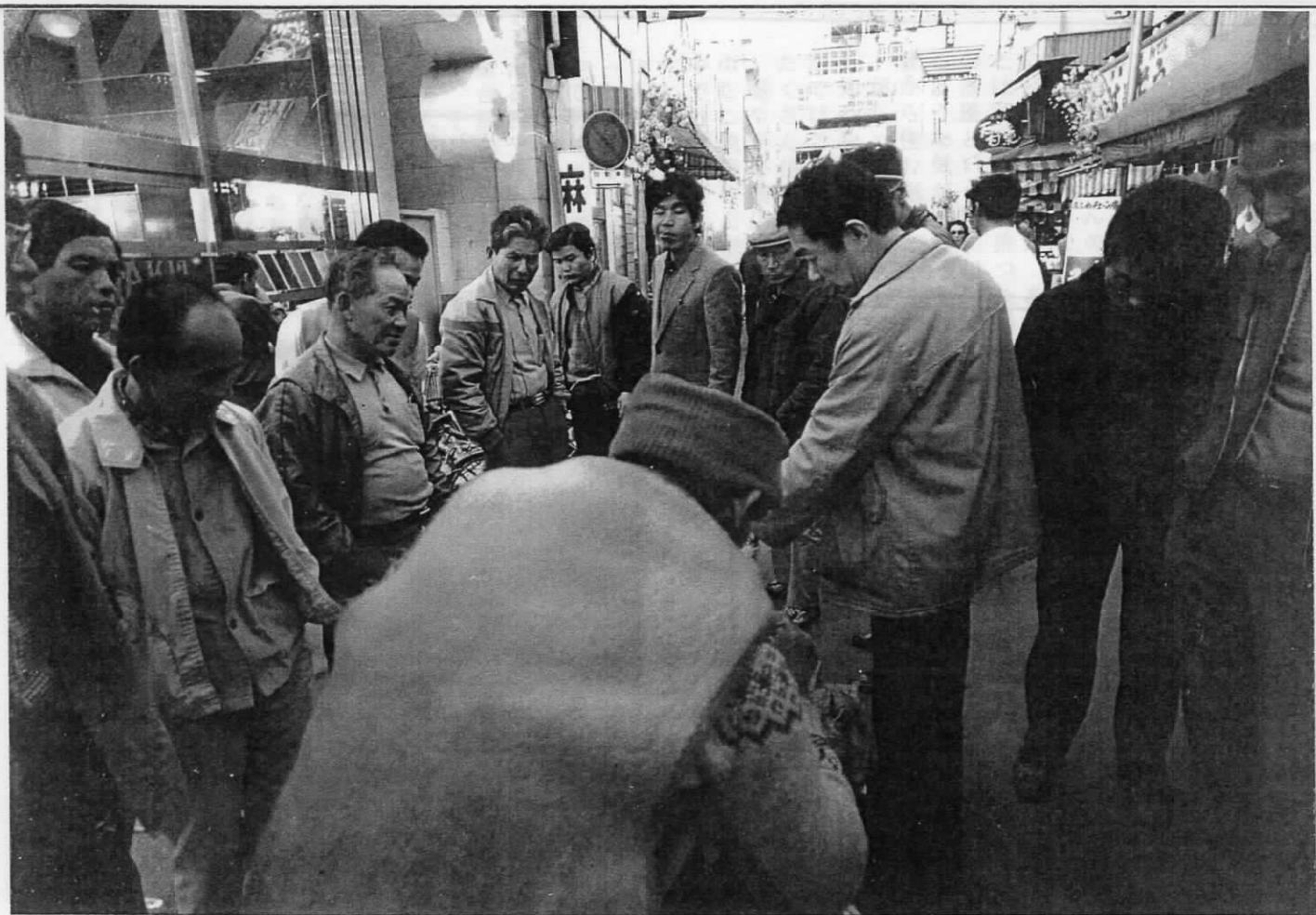
現在の旭町



飛田

1975年頃の旭町





人の見える町

前日も書いたが、地下鉄動物園前を上がり、ジャンジャン横丁と反対側にある商店街（飛田から阿倍野まで抜けていく）の入り口の角に、ガラス張りの小さな喫茶店がある。十年ほど前、阿倍野に住んでいた僕は休日になると毎朝その喫茶店で頭を醒ましていた。そこで休日の一日の行動が決まるのだ。しかし、新聞を見ていても、店でかかっているラジオに耳を傾けても、なかなか名案が浮かんでこない。そんな時は五時間でもそこに居る。九時にモーニングサービスを頼み、十二時頃にはピラフを頼む。その間、コーヒ―は三杯はおかわりをする。ポケットに突っ込んである文庫本を読んでいたりもする。でも、何よりかその店の居心地のよいのは、いろんな人がガラス越しに見えるからだ。昼の十二時になれば地下鉄の出入口から動物園に向かう家族連れやら、古着の店を出す貧しい人やら、とにかくいろんな人々がガラスの向こうに現われては消え、現われては交わる。そして、そして、その人の人生のほんの一瞬を垣間見る。そこには決して格好をつけない、正直な人の姿があった。

ちようどその頃から、自分の気持ちとは反対につまらない都会になつていく大阪が嫌になり始めた。そして、旅に出た。

それから年月が経ち、僕はニューヨークやパリの喫茶店に居た。時には二階から人を見下ろし、時には店の外に用意された椅子に腰掛けながら、どこからともなく聞こえてくる音楽に耳を傾けたりしていた。僕は何時の間にか、あの新世界の人々のようにハンティング帽のよく似合う大人になっていた。

写真・文

加藤

一

エルツール小川

「マントヒビ」

今回の「トビタOS」もそうだがこの「マントヒビ」も今はないものを書いてみようがないじやないかという声が聞こえて来そうだが、書く。ロック喫茶である。阪堺線天王寺駅前に口を拡げている阿倍野銀座をトコトコと歩くとそこには天王寺思い出通人情坂へ大塚まじである。派出所の前を通り居酒屋「三喜屋」を過ぎると薄暗いアーケードが待ち構えている。怪しげな赤紫色の看板きらめくスナックの並びに突如おどろおどろしいカラーペンキ手作り絢爛豪華看板壁画が道行く人を圧倒して現われる。気の弱い俺は初めての店に入るとき莫大なエネルギーを使う。二度、三度と店の前を行ったり来たりするうちに「何バカなことやってんだ」と自責の念にかられてエイッと扉を押すわけだ。「マントヒビ」はその点格別に疲れた。逡巡が二、三度どころか二、三日続くのである。諦めて他のどうもいような店に入って日を改める。そうこうするうちにある日、手作りの木の扉がギイッと開いて客が出て来た。これがチャンスだ、とばかりにその開いた扉を手で支えて飛び込んだ。中は暗闇だった。虚無の洞窟が鯁の寝床のように伸びていた。俺は漆黒の空間を手探りで歩いた。闇をつんざくロックの大音響だけがスパークしていた……と書くの大げさだが、ま、そんな第一印象だった。木製長椅子の上にコーヒ―袋が敷いてあり、テーブルはウイスキー樽だった。昆虫の風貌のサングラスのマスターがヌツと現われる。「コ、コーヒ―と俺。上ずった気持ちを抑さえて周囲を見ると男たちが小難しうな顔をして音に集中していた。皆が一見の俺を値踏みするように見ている（ような気がした）。木をくり抜いたレコードジャケット掛けが二つあり、NOWとNEXTとに分けて演奏アルバムが入れられてある。入り口すぐのカウンターは常連用で、マスターがそこから手を延ばしてジャケットを入れ換える。水びたしのトイレットからブーンと芳香が漂って来る。決して綺麗とは言えずマスターも無愛想なのだが俺はすぐ気に入ってしまった。それにしても普通の民家なのにこんな大音響出しても大丈夫なんだろう。隣の八百屋のおじいちゃんはどう思っているのか。店内すべて自己改造手造りなのでスキ間だらけなのだ。天井には防音用とおぼしき綿のアルミ包みが吊り下げられている。ある時マスターに尋ねた「隣から文句来ないスか」。「ええんや」と彼は答えた。だから理由は知らない。天王寺に来るといつもここに寄った。一人で、或いは友人と落ち込んだときはいつもここだった。何しろ俺の心の暗さよりも店の闇の方が深く濃いので打ち負かされてしまふからである。コーヒ―は美味くないのでいつもビールだった。喫茶店のビールというのは小瓶が普通だがここは同じくらしいの値段で大瓶なのである。昼間や仕事前のビールは効くが、大瓶なのを知らずに注文し一本空けてフラフラ気味で（なにせ空腹だったのだ）仕事場に帰ったこともある。その後店内は改装を繰り返していた。しまいには奥の壁をとっ払って大型テレビをドンと置いたり、ライヴをやったりしていた。天井の

防音アルミは破れて綿やスポンジが客の頭上に垂れ下って来た。トイレの水びたしは更にひどくなり、ゴキブリ君が徘徊を始めた。店の闇は益々深くなっていたのである。店と客と音楽と時代が飽和点に達した時、閉店となってしまった。阿倍野地区再開発の愚劣な波がこの旭町地区に押し寄せてきた時の事である。もう十年以上も前の事である。あのマスターも「アウシュビッツ」というバンドでタイコをたたいていたが今はどうしてしているのだろうか。アフリカ料理店で働いているという噂を耳にしたこともあった。今は店も通っても跡形なく消え去ってしまった。でもそこを歩くと「マントヒビ」の幻影を探し求めていた自分を発見する。闇を拒否した時代であればなおさらである。



1975年のマントヒビ



佃島事情

最近書店に並んだ本で『佃島二人書房』というものがあった。あれよあれよという間に直木賞を取ってしまったが、あの本の舞台になった佃島で僕は生まれ17才まで暮らした。今でも両親や祖父、祖母は住んでいる。僕は家族とは離れて神戸で暮らしている。訳だがよくテレビなどで佃島を目にする機会がある。江戸っ子、下町などのキーワードのときは必ずといっていいほど佃島が登場する。同じ下町の浅草などと違って観光的光景的なものが一切なく（それでも観光バスがやってくる）小さな所なのだが江戸の情緒を残した町並みとちょっとしたストーリーで受けているようだ。

佃島の歴史を簡単に書くと、江戸時代初期に人口増加で食糧不足になった江戸に、徳川家康と呼ばれた大阪の佃村（西淀川区）から移った漁師が住むため隅田川の三角州であった石川島の隣に埋め立てられた島ということになっている。完成したのは寛永年間で、当初佃の漁師は日本橋のあたりに住んでいた。彼らにはさまざまな特権が与えられ、その中の一つに日本中何処で漁をしても構わないという徳川家康のお墨付きがあり、それを巡り何度かトラブルがあった。現在は行方不明らしい。また、隅田川の白魚は佃島の漁師しか獲る事ができず、年に一度、將軍家に献上された。こちらは現在も続いている。（今の隅田川で白魚なんかは獲れるはずもないので形だけが残っている）その後何度か埋め立てが有りほとんど広がったが元佃、新佃と分けられている。佃島と言えはこの元佃を指して言う。（実際祭りになると区

別がはっきりする）

佃島には店と呼べるものがお菓子屋1軒、酒屋1軒、床屋1軒、釣り舟屋1軒と佃煮屋が3軒しかない。佃煮屋にはそれぞれ味の好みに合わせてお得意があった。（天安、佃源、田中屋の中でわが家は田中屋で買っていた）昼には八百屋さんがトラックでやって来て市を開く。いつもお婆さん達はその回りにたむろして世間話をしている。（佃島の住人はほとんどが近くの魚市場で働いていて以前はお婆さんぐらいいかない）を向けたら、あらか時から観光客になっちゃったのといつて笑われたことがあった。僕がまだおむつを着けていた頃から知っている人たちのなかで全く頭が上がりえない。佃島の住人はほとんどが魚市場の人間というところもあってお店の屋号で呼び合う。少年野球の監督なんかもそう呼んでいた。（僕の家は屋号が佃寅なので佃寅ビシッとやれビシッとよく怒鳴られた）

僕が子供の頃の佃島はまだ漁村の雰囲気を残していた。今でもあるが、お堀には船がいっぱい浮かべられ回りに納屋が並んでいて、当時はアジの開きを干してあったり、鰯の燻製を作っているところもあった。僕はそこで燻製を貰いポケットに入れて遊び回っていた。その塩辛い燻製を食べるとすごく喉が渇いた。今考えるとすごく魚臭い子供たちだったようだ。お堀には夏になるとハゼが集まりよく釣った。でも余りにも水が汚くなって釣ったハゼは食べれず流していた。現在お堀の方から見ると少々気味の悪い光景に出会う。船ごしに高層マンションや変な形をした小学校が見える。（小学校の屋



根に何とピラミッドがついている)
以前の石川島の倉庫が再開発され、
大川端リバータウンとして高層マン
ション群が建ち並んでいる。低い建
物しかない佃島からちよっと視線を
うえに上げるといきなり目に飛び込
んでくる。(夜に見るとクリスマスマ
スツリーに見える)その開発に伴いお
堀を埋め立てる計画もある。それを
したら最後佃島らしさが完全に消え
てしまうだろう。

お役所という所は景観破壊にかけ
ては天下一品の腕を持っている。そ
の癖、守るなると住民の都合お構い
なしで条例などで締めつけてくる。
やはり住民が守らなくてはならない
のだろう。しかしその住民も観光収
益などといったものに直接関わって
こないと殆ど無関心で積極的には動
こうとしない。結局は外の人間に頼
るしかない。僕は佃島を離れて暮ら
すことでそれが分かってきた。

先日母と電話で喋ったときに中央
区によってお堀沿いの納屋が壊され
た事を聞いた。僕の家も使っていな
いが納屋を持っていたらしく、取壊
しに当たって区より幾らかのお金が
下りたようだ。聞いたところによると
画家の人で途中で納屋がきえてしま
ったために絵が進められずに困っ
ている人がいるそうだ。確かに佃島
が変わらずにいないてはならないと
は思わない。しかしそれは住民の世
代と共に変化していくことが望まし
い。そして何よりも江戸の情緒を残
し訪れた人々に何か共通の懐かしさ
を覚えさせる佃島の幸せな役割につ
いてもう少し考えなくてはならない。

高橋 伸之



淡路のこと

瀬戸内市子

梅田までほんの10分で行けるような位置にありながら、時間の流れにとり残されたか、あるいは世の中とは別の流れを持った場所がまだこの淡路という町には、あちこちにあるような気がする。それはここには昔から住む老人たちのコミュニティがしっかりと存在しているからかも知れない。私の知っている町のなかではこの町はひとときわ老人たちがたくさん住んでいるように思える。賑やかな商店街の果てのボロボロのたこ焼屋さんでは、ほの暗い店の中でおばあさんがせせせせせせせせとたこ焼を焼いていて、順番をまつ人たちに声をかけている。

「すんませんなあ、もうちよつと待っておくれやっしや」

また韓国の人が経営していると思える四十年も続いていると聞く韓国屋台風の不思議な飲み屋さんがあるが、その常連の人たちもやはり年配の人がほとんどなのだ。

三つある市場に来る人たちもおばあちゃんや心なしか多いように思える。洋装店に飾ってある地味なデザインや地味な色合のブラウスや肌着、ズボンなどもおばあちゃん向きだ。もちろん彼等もはじめからおじいちゃん、おばあちゃんであつたわけではなく、普通の生活を普通に続けているうちに、いつのまにか時代のほうが彼等を追い越していったのだ。

この町にはそういう人々をやさしく

く包み込んでくれるようなあたたかさがある。この町には年を重ねた人達が現役で仕事をし、楽しんだり遊んだりする空間があり、安心して生活する場所があるように思える。

その意味でこの町は老人がコミュニティにうまく組み込まれた成熟した町だと云えるかもしれない。

しかし夜、電車から吐き出されて淡路の町へ吸いこまれていく人々はおしなべて若く、古いアパートはワイルドマンションへと姿を変え、下町の情報交換の場であつた銭湯も段々と少なくなつてきた。

この町も徐々に性格を変えつつあるようだ。

今またこの町には若い外国人が多く住んでいる。在日韓国・朝鮮の人々だけでなく、市場をフラフラ歩いていても広東語やタイ語や台湾の言葉が聞こえてきたりする。ここに住むそういつた外国人や老人をくくる共通項は、この町の物価の安さや気安さなのだろうか。どうやらこの町は古いコミュニティと就職や結婚・転勤でどんどん移動していく若い層の二重構造の町へと変容していく途中のようだ。

もし老人達のコミュニティが喪失してしまうとこの町は浮草のような若者だけの町になってしまうのだろうか。

その店は西淡路の商店街をぬけたところにある。お風呂やさんに行く人たちのほとんどはその家がお好み焼屋だなんて考えたこともないだろう。ここが店であることさえ気がついてないに違いない。それほどころか

誰かが住んでいるなんて誰も信じないだろう。たぶん昔の市営住宅を改造しただろうそのぼろぼろのお店は道に面していて、店の正面の看板は完全に錆びてしまいいつも読めない。ペンキのはげた壁に波板ガラスの窓がはめてある。窓からはかろうじてほのか明かりがもれていた。時々人の声やお好焼を焼く匂いがしていて私は大変興味を引かれはじめてしまったもの、やつぱりいつもためらつてしまつて入ることが出来なかつた。印度や東南アジアの国ならばともかく、こんな店が実際に営業しているなんてちよつと信じがたかつたからだ。

その店に入る機会がくるには何年もかかつた。思い切つて観音開きのドアを開けると、二坪ほどのお店には二台の鉄板の台が据え付けてあつた。奥の台の近くに七十歳ぐらいのお婆さんが居て、腰をほとんど直角に曲げながら、眼鏡の奥からこちらをいぶかるように見ながらこう言うのだつた。

「おそば、おそばか?」……面食らつていると、「おそばやつたらないで」どうやらおそばが切れたのでモダン焼きは出来ないというところらしい。わたしを頭のてつぺんから爪先まで嘗めるように見定めたとで、「何すんの?」……「豚玉おねがいします」それを聞くとお婆さんは大義そうに小麦粉をとき、キャベツを切り始めた。

店を見回すと油で汚れた店内にはおきまりの漫画本や週刊誌が置いてあり、訪れた人の名詞がたくさん押しピンでとめてあつた。壁に値段表

が貼つてある。ほとんど油のなかにうづもれてしまひそうになつてゐるその値段表には豚玉は250円と読めた。十年前の値段だ。店には私の他に二人の客が豚玉とモダン焼きを食べながら話をしていた。

「おかあちゃん不良やつたからなあ、せやから十五でわたしを産んだんやろ?」

「そうやなあ頃よう遊んどつたもんな」

お婆さんが会話を割り込んできた。

「みつちゃん幾つになつたんかいな」

「私もう三十になつたわ」

「へえ早いもんやなあ、まあちゃん?」

「高一や」

「へえーそうかいな、ほんまに早いもんやなあ」

どうやらふたりはヤンキーの親子という感じだが、なかなかほえましい雰囲気がある。この店はいつかあつたけれど、何だかもうこれで充分な気がしてきつた。ようするにずつと前からこの店はあつて、この淡路の町のいろんなことがこの店に溜まつているのだ。もう八年も淡路に住んでいる私だが、ちよつと場違いな感じがして少し恥ずかしかつた。

「よつこらしよ、ああしんど、ちよつと横になるわ」

もうへこんでしまつて変形した鉄板の上で注文の豚玉がジュウジュウ音をたて始めると、お婆さんはそうつぶやいて隣の部屋で横になつてしまつた。やつと出来上がった時に、「持ちかえりにしてもらえませんか」



と言うと。
 「もうー、もつと早よ言わんかいな
 ！」と、怒られてしまった。
 ちやんと怒ってくれる店だった。
 もつと早くからこの店に通つてい
 たならこの町の本当の住人になつて
 いたかも知れないな。いや、それで
 も私はこの町でもただの旅人だった
 のだろう。
 この町を後にしようという時にな
 づて、初めてこの町の優しさに気づ
 き始めてきた。こんなお婆さんのい
 る古ぼけた店は、この町にいくつか
 残っている。しかしそれもあと何年
 かすれば段々となくなっていく。淡
 路の町も変わっていくだろう。ゆっ
 くりとこの町を味わった後で心残り
 なく去りたいと、今、私は思ってい
 る。



西新宿番外地通信

(2)

サンボルノ川村

そばが好きで、散歩の途中、何か食べたくなると、たいていはそば屋の暖簾をくぐることになる。いわゆる老舗の名店もいいが、町内の人が気軽に立ち寄る、どこにでもありそうなフツツのそば屋がまたよろしい。小難しいことを言うそば通は見向きもしない、下手するとカレーライスや中華そばなんてのをやっている店でも、本人が気に入っていいの

だ。早稲田界限でいうと、亀鶴庵というのがぼくの好みの店だ。もう一軒、穴八幡下に三朝庵というのがある。この店は表に、元近衛騎兵隊御用、大隅家御用などと恭しく書いてあるけれど、気軽に入れる食券制の大衆的なそば屋だ。店内には早稲田出身の有名な写真家が所狭しと貼ってある。早稲田とは縁もゆかりもない者には少々目障りなのだが、これはまあ仕方ないか。いつものように、どつちにしうか少し迷って、今日は亀鶴庵だな、という気になつていく

け。そば屋は屋下がりがいい。客は多からず、少なからず。店の人も焦らず騒がず、こちらの様子を見て、おもむろに注文を取りにくる。そんな全体にのんびりした雰囲気がいい。

「おろしそばですね」
娘さんが注文を確かめ、につこり笑う。二十歳前後の色白でポツチャリした女の子。どことなく愛敬があり、笑うと片えくぼができたりして……。そば屋の娘さんに限って言う、と、ぼくの好みはスコブル通俗的なものだが、この日の亀鶴庵はほほ理想どうり。

小座敷の座卓に片ひじついで汗を拭いていると、プチツという音がして、テレビがついた。サービスのつもりらしい。せっかくだから、ぼんやりとながめる。見覚えのある政治家が雁首をそろえて、記者の質問に答えている。日本新党、新生党、社民連、さきがけの四党首。総選挙をにらんでのPRも兼ねているんだろう。誰とは言わないが恐ろしく弁舌さわやかな奴がいる。どんなに敵しく追求されても、眉根ひとつ動かさず、立て板に水の返答ぶり。こういう野郎は信用できねえなあ……。腹ごしらえをしたら、古本屋をはしごして歩く。神田神保町とは比べべくもないが、高田馬場から早稲田まで、かなりの数の古本屋が点在している。三十軒以上あるのではない。か。そのうちの軒で、眉村卓の文庫本が十七冊千円で出ていた。ほしかつたのは『わがセクソイド』だけだ。あんなに安いので全部買ってしまう。左手に信玄袋、右手に文庫

本を入れたビニール袋を下げて、フンボルト・ペンギンみたいにヒヨコヒヨコ歩き回る。小一時間も歩いて汗だくになった。ひと風呂浴びたい。となれば、銭湯に限る。

松の湯は開けたばかりで、近所のご隠居風が三人、早稲田の学生らしいのが二人だけ。湯船につかって、背景画を見上げる。天草五島とは珍しい。しかも全面タイル張りだ。一センチ四方くらいのタイルを一枚ずつ並べて、海と山、そして鳥々をつなぐ橋を、微妙な色使いで描いてある。名前を思い出せないが、こういう技法の点描画家がいたっけなあ。どつちにしても手間のかかる仕事だったろう。

シャンプーと石けんは番台で買った。風呂代と合わせて四百円。石けんに何やら刻みつけてある。ミス東京、だ。シャンプーして、ミス東京を股間のものにこすりつけ、ゴシゴシ洗う。隣の青年が怪しんで横目で見るが構うものか。ミス東京はぼくのものだぞ。

「いいヒゲですなあ」
風呂から上がってパンツをはこうとすると、御隠居さんの一人が声をかけてきた。

「いやあ、無精ヒゲがいつの間にかこんなことになりました……」
パンツをはきながら話すのは失礼かもしれないが、パンツをはこうとしている人いきなり声をかけるのはどうなんだろう……。「私の年くらいになれば、もつと立派になるねえ」

アラカンによく似た御隠居さんは、

そう言つて、さつさと体重計の方に
行つてしまった。
風呂上がり「シエヌー」という
喫茶店でひと休み。ACCTミニシア
ターで溝口健二の『浪華悲歌』『祇
園の姉妹』『残菊物語』を見るつも
りが、ぼんやりしているうちに上映
時間が五分過ぎてしまった。仕方が
ない。出直すことにしよう。五分く
らいというなかれ。こういう時、ぼ
くは『アニー・ホール』のウディ・
アレンにちよつと親近感を覚えるの
だ。
今度は朝一番に映画を観て、三朝
庵で天ざるでも食べよう。

(了)

梅田↓難波・無銭散歩

エルトル小川

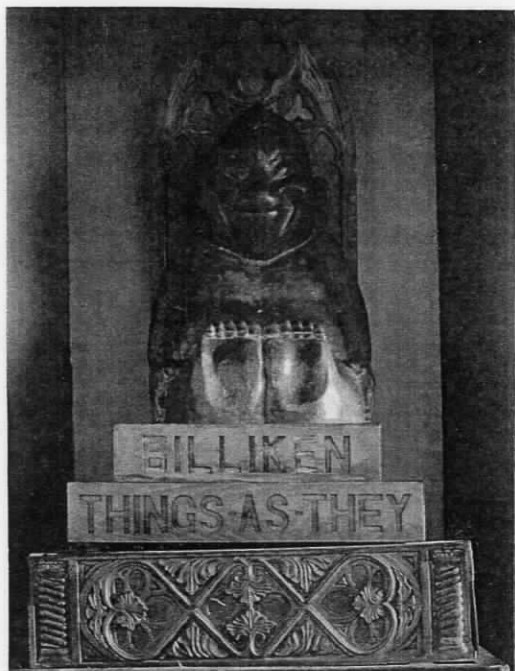
日曜日にはなるべく繁華街へ出ないようになっている。誰でもそうだろうが人混みに巻き込まれて疲れ果ててしまうからだ。でも用があつて出掛けざるをえない日もある。きょうがその日なのだ。難波ジョイシネマ（もうすぐ閉館になってしまふ。グスン）で上映中の「シングلز」の前売券を買っていたのだ。他に行ける日がない。腰を上げた。梅田↓難波というのは大阪の大動脈で、急ぎの場合は地下鉄御堂筋線ということになるのだ。ところが俺はこの地下鉄というヤツが嫌いなのだ。窓の外が壁で目のやり場がない。暗いトンネルをゴォーッと電車が進んでいく音を聞いているとこのまま地獄に吸い込まれてしまふのではないかと錯覚する。視線恐怖症と閉所恐怖症という持病を持つ身としては困った乗り物なのだ。どうしても乗らざるを得ない時は堺筋線で日本橋まで行き法善寺横丁を通り抜けたら、四ツ橋線で難波駅まで行く。空いていて症状が軽微なものにとどまるからだ。少し時間があれば大阪駅で環状線の内回りに乗り（海が見えるのでわくわくする）新今宮で乗り換えて湊町で降りるといふテもある。もう少し余裕があればバスがいい。大阪駅前から西船場か鶴町行きに乗り、難波に近いバス亭を適当に見つくるって（桜川とか幸町とか）降りて東に十分ほど歩けば道頓堀が目の前だ。それとこ

れは少し距離があるが上本町行きに乗り、終点上六で降りてそこから上町台地を散歩して生国魂神社↓黒門市場で千日前へというルートも楽しいなあ。いやいや急ぎでなければ御堂筋を二本の足で歩くのが一番楽しい。大阪は歩行者には冷たい町なので車のクラクションに追い立てられずに歩ける道が殆どない。車でなくとも自転車に脅かされることもしばしばだ。その点、御堂筋が一番マシに思える。難波まで小一時間で着く（これを長いと見るか短いと見るかは意見の別れるところだろうが）。淀屋橋のビジネス街に突如飲み屋横丁が口を開いていたり、お屋のオニギリを食べるのに格好の難波神社があつたり、きれいなトイレのホテル日航大阪があつたりと全く退屈しない。日曜日であれば隣の三休橋筋もおススメだ。浪速教会や綿業会館や吉田理容店などの古い建物が目白押しで、立ち止まったり中をのぞいたりばかりしていると全然前に進まなくなる。困ったことだ。で、今日は夕方から映画を観ることにして、のんびりコースで行くことにした。阪急梅田駅の西側に巨大な国鉄（JR）という言葉を俺は認めない。梅田貨物駅がある。係員におこれないかとヒヤヒヤしながら敷地の中を歩く。大ドームの中にコンテナが山積みだ。流通の迫力を直に感じた。これって不法侵入なんだろうか。破れた金網のスキ間から入ったもんな。福島側へ抜けるとあの梅田の喧騒が嘘のようになつて静かだ。阪神福島までたどり着けばもうこつちのものである。ここから野田にかけては戦災を免れた古

い家並みがけつこう残っていて何度歩いても心安らぐ場所だ。浄正橋交差点から南西方面に進んで迷路の中に入り込む。神社があり井戸があり家内工場があり縁台があり猫がいて少々慣れが要するが路地だけを通つて野田の中央卸売市場まで抜けることが出来る。誰かにこの喜びを告げた。が、聞かずに持った奇人な人はいない。当たり前か。で、この中央卸売市場というのがまた夢のワンダラランドなのだが詳細は別の機会に譲ろう。フーラフーラとこの市場を抜けて安治川沿いに陽光を浴びて歩く。安治川トンネルという歩行者用の通路がある。エレベーターで川底に降りて向こう岸にわたるのだ。大正区の渡し船と同じ大阪市土木局の管轄なので無料です。対岸に渡ると長大な九条の商店街が待っている。この界限も無尽蔵の魅力に満ちた場所なのだがこれまた詳しくは改めて又ということにしよう。この商店街を延々と歩いていると難波へ行くことなどどうでもよくなつてくるのだ。が、そこを我慢して……。この商店街は初めて歩いた二十年前と同じ懐かしい顔で俺を迎えてくれる。大事にしたい通りの一つである。破壊されてゆく大阪駅前前の桜橋織維問屋街が可哀相でたまらず、せめて記録しておこうと初めてカメラを買って求めたのもこの商店街で買ったなあ。で、地下鉄九条駅を更に直進するとまた川にぶつかる。海の香がほのかに漂う。この千代崎橋を渡ると急に街の濃度が希薄になる。何故かは分からない。これは他の町でも体験することだ。川や橋が何かを分ける境界に

なっているのだ。でも希薄な町もそれはそれで良いものだ。人が住んでいる以上、生活の匂いは必ずあるのだから。この辺から東へ直進すると難波方面だが、立花通家具商店街というのが道頓堀川と平行して走つていて見て歩くだけで楽しいのだ。車もあまり通らないし。知らぬまに全部歩いてしまったなあ。かれこれ二・三時間歩いただろうか。映画にはまだ時間があるので黒門市場の近くの銭湯で汗を流し、赤垣屋で一杯ビールを買ってから高島屋の屋上で太陽を眺めつつ時間をつぶすのもいいなあ。と、いうわけで俺は御堂筋というタテ方向から難波に攻め入るのが好きなのです。急に人混みにぶつかるといふのはこの東西のヨコ方向から入るのとは勝手が思つてます。帰るやり方だ。今日の無銭旅行費用は七百円。アリガトサン。





ビリケン由來記

ビリケン(BILIKEN)は1908年(明治41年)アメリカの女流美術家E.L.HORNSMAが奇怪な神の姿を夢見て作った像で当時のアメリカで大流行したものです。
明治45年新世界にあつたルナパークにビリケン堂を造りビリケン像が安置されていた。
ビリケン像は新世界の名物となりビリケンまんじゅう、ビリケン人形などの土産も売られて世界的な流行をみました。ルナパークの閉鎖とともに行方不明になつていましたがこの度新世界の復権を願つて元の像を探しだし安置したものです。

編集後記

ここしばらく、長びく梅雨の合間をぬって、再び西成あたりを彷徨っていた。実は、通天閣から下寺町の方角へ進もうと思ったのだが、なぜか戻ってきてしまった。それは今再開発がひどく早まってきた旭町(阿倍野区だが)へ足を延ばす必要を感じたからだ。おそらく、もう数年で昔の痕跡が全く失くなるほどに変わってしまうだろう。あつと気づいた時には遅いのだ。しかし、新築マンションから数メートルしか離れてないところに、飛田が旧態依然として残っているのは、頼もしいかぎりだ。今回、阿倍野墓地の裏に抜けて、眼下に広がる、天下茶屋あたりを望んだ。また一つ大阪の大阪たる風景を発見した気になって嬉しかった。

1993・8・15

編集・発行・責任者

西宮市田代町16-3-201

☎・FAX

0798 66 4074

永田 収

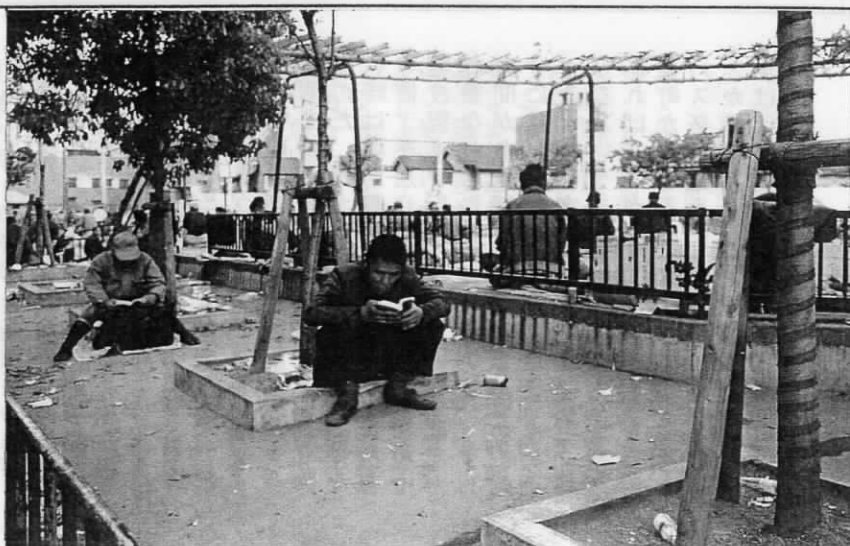
無断複写非営利にかぎり可

本紙はコピー代実費として百円いただきます

SANPO

下町通信

3号



BOOK

(西成のことを知るためにいろんな本を集めてみた。この中の数冊は今手にいれる事はむづかしいかも知れないが、他は大書店で見つけることができる。)

労務者渡世

釜ヶ崎通信 寺島珠男編
風媒社 1976年発行

実際に釜ヶ崎で出されていたガリバン刷りの雑誌を単行本としたもの。労務者の人々の肉声が多く載っている。我々が知ることに少ない、飯場の話や釜の飯屋の話、おかまの話、それに普通では取り扱わない労務者の歴史等々。まさに真面目に取り組んだアウトサイダー達の本。

釜ヶ崎 旅の宿りの長いまち

寺島珠男

プレイガイドジャーナル 1978年発行

放浪の詩人が釜に長期滞在して地から見た釜の姿、また釜からの視点。この本も今は手に入れるのが難しいかも知れない。上記の本と共に教えて貸してくれた友人に感謝、本人は読み進めるのがつらくなる本だと言って貸してくれた。

釜ヶ崎 歴史と現在

釜ヶ崎資料センター編 三一書房

これは今年の6月に出た本、釜ヶ崎の入門本としては最適。漫画家ありむら蒼の描く江戸時代から時代を追った釜ヶ崎の風景のイラストは一見の価値がある。これを見ると、飛田は昔刑場だったことや、長町というスラムが江戸時代後期に、今の日本橋付近に存在していた事などがわかる。結局そのスラムは大正時代に、新世界での内国勧業博覧会開催時に現在の釜ヶ崎地域内の紀州街道沿いに移されたという。そして戦災で飛田あたりを除き焼け野原となり、被災者が南海ガード下などに集まりバラック群をつくり再びスラム化していったらしい。

写真集 新世界むかしも今も

百々俊二

長征社 1986年発行

10年近くかけて撮った新世界界隈のモノクロ写真集。下町育ちの作者が気負いなく撮った路地裏の世界。後半の人物を中心に据えた写真はなかなか迫力がある。

写真集 新世界物語

北井一夫

長征社 1981年発行

昔、木村伊兵衛という写真家がいち、主に東京やパリの下町をライカというカメラでひょうひょうと撮って歩き最後までそのスタイルを崩さなかった。ライカ使いの名人とも言われた。この写真集を見ていてそんな木村伊兵衛の写真を思い出した。一世を風靡したことのある北井一夫に失礼かもしれないがこれは最大級の誉め言葉だ。